

【個人研究発表4】

A. S. ニールの女性解放思想とサマーヒル・スクールの女子教育的側面

持田 洸（立正大学）

本発表の目的は、A. S. ニール（Alexander Sutherland Neill, 1883-1973）の教育思想および社会思想に内包されている女性解放思想の様相を明らかにするとともに、彼が創設したサマーヒル・スクールにおける女子教育的側面を見出すことである。

ニール思想研究において、「女性」およびジェンダー、フェミニズム等に着目した研究は乏しいことが現状として見受けられる。しかしながら、ニールのそれに関する態度に対して否定的に捉えた指摘は確認できる。例えば、「強制的異性愛主義」を「同性愛の否定」および「女性が男性に尽くして従い、男性が女性を守り支配するという構図」が当然視されてきたものとして説明した上で、ニールをその文脈の中で説明している研究がある。確かにニールが同性愛を性的倒錯の一つとして説明していたことは事実であるが、男性を主、女性を従とするような家父長的思想を有していたか、という点においては定かではない。また、サマーヒル・スクールを「性別を含む異なるアイデンティティを持つ子どもの間で民主的で友好的な関係の構築に関連する民主的実践を体現しているもの」として評価しているものや、彼が男女を対等な存在とみなしていたとしている研究もあり、これらから先行研究間の矛盾が見られることが伺える。

そこで本発表では、先行研究において明らかにされていないニールのフェミニズム思想的側面を明らかにしたい。とりわけ彼が家父長的思想をむしろ否定的に捉えていたのみならず、男女の社会的平等と女性の社会進出の希求といったフェミニズムに通底する思想を有していたことを論じていく。

加えて、彼のそのような女性解放思想は社会思想に内容されるものとして捉えることができるが、ニールの教育思想は彼の社会思想と密接に結びついていることが先行研究において明らかとなっている。彼はギルド社会主義の立場を取り、家父長制や資本主義を批判し、教育を唯一の社会改革の手段と捉え、サマーヒル・スクールでの教育によって、現在の社会体制を払拭しようとする態度を育てることを希求していた。そして、そのような態度を育てることによって、その社会体制に起因する性別に関する差別や格差、権力関係等の種々の問題の解決を図ることを明確に目指していた。

この点を踏まえると、彼の女性解放思想が教育思想およびサマーヒル・スクールにおける教育実践に結びついていることが考えられる。それに加え、女性が受ける様々な影響が家父長制や資本主義といった社会制度に起因していることを指摘した上で、サマーヒルで育った女子はどのような影響を受けない、ということを明確に述べている箇所も彼の著書の中で確認することができ、女性解放思想とサマーヒルの教育実践との関連を明らかにすることによって、女子教育的側面といった新しい視座からサマーヒル・スクールを捉えることができると考える。